

サー・トマス・ブラウンと夏目漱石

—『三四郎』をめぐって—

河 野 豊

はじめに

漱石とブラウンとの関係については、つとに指摘されている⁽¹⁾。『三四郎』の中にブラウン (Sir Thomas Browne, 1605 - 82) の『壺葬論』 (*Hydriotaphia, Urn-Burial, or A Brief Discourse of the Sepulchral Urns lately found in Norfolk*, 1658) の一節が引用されていることがその大きな理由である。もともと英文学者であった漱石は、自らの作品の中で英文学をよく使っており、ブラウンもその一つであった。ブラウンは当時はもちろん現在でも日本でよく読まれているとは言い難い作家である。漱石はなぜブラウンを引用したのだろうか。小論は、その漱石の意図について考察する試みである。

1

『三四郎』が『東京新聞』に連載されたのは1908年9月から12月で、漱石はその前年東京帝国大学を辞し、朝日新聞社に入社しており、『三四郎』はその後に書かれた3作目の長編小説である。つまり漱石が英文学者としてではなく小説家として生きることを決心して間もない頃の作品と言える。朝日新聞社への入社後の第1作は『虞美人草』で、こちらもイギリスの小説家ジョージ・メレディスとの関連が従来から指摘されている。

さて、漱石はブラウンをどのように使っているかを見てみよう。確認のため、引用部分及びそれに関係する箇所を話の展開に従って列挙しておきたい。それぞれ便宜的にアルファベットをふっておく。

『三四郎』の中で、ブラウンの『壺葬論』が出てくるのは、三四郎が広田の見舞いのためにその家を訪問する場面(十)で、『三四郎』のかなり後の部分である。

(A)

広田先生は又立つて書齋に入つた。帰つた時は、手に一卷の書物を持つてゐた。表紙が赤黒くつて、切り口の埃で汚れたものである。

「是が此間話したハイドリオタフヒア。退屈なら見てゐ玉へ」

三四郎は礼を述べて書物を受け取つた。

「寂寞の罌粟花を散らすや頻なり。人の記念に対しては、永劫に価すると否とを問ふ事なし」といふ句が眼に付いた⁽²⁾。

広田は「此間話した」と言っているが、『三四郎』においてこれ以前の場面では言及はないので、広田の言葉は、ブラウンを持ち出すのにいかにも唐突な感じを避けるための便宜的なもの

考えられる。

従って三四郎は戸惑うことなく本を受け取り、中を見て、上記の一節を目にする。三四郎に本を渡した後、広田は客につきのようなことを話す。

(B)

現代人は事実を好むが、事実に伴なふ情操は切り棄てる習慣である。切り棄てなければならぬ程、世間が切迫してゐるのだから仕方がない。其証拠には新聞を見ると分る。新聞の社会記事は十の九迄悲劇である。けれども我々はこの悲劇を悲劇として味はう余裕がない。たゞ事実の報道として読む丈である。自分の取る新聞杯は、死人十何人と題して、一日に変死した人間の年齢、戸籍、死因を六号活字で一行づゝに書く事がある⁽³⁾。

この場面で広田が「死」を持ち出したのは、三四郎に「ハイドリオタフヒア」(=『壺葬論』)を渡したことからの自然な成り行きである。なぜなら「ハイドリオタフヒア」の主題は「死」だからである。この後、三四郎は、広田と客である柔術家の話に加わらず、外に出る。次に「ハイドリオタフヒア」からの引用が続く。

(C)

「朽ちざる墓に眠り、伝はる事に生き、知らるる名に残り、しからずば滄桑の変に任せて、後の世に存せんと思ふ事、昔より人の願なり。此願のかなへるとき、人は天国にあり。されども真なる信仰の教法より視れば、此願も此満足も無きが如くに果敢なきものなり。生きるとは、再の我に帰るの意にして、再の我に帰るとは、願にもあらず、望にもあらず、気高き信者の見たる明白なる事実なれば、聖徒イノセントの墓地に横はるは、猶埃及の砂中に埋まるが如し。常住の我身を觀じ悦べば、六尺の狭きもアドリエーナスの大廟と異なる所あらず。成るが儘に成るとのみ覚悟せよ」⁽⁴⁾

三四郎は、歩きながらこの一節を読み、広田から言われたことを思い出す。

(D)

広田先生から聞く所によると、此著者は有名な名文家で、此一篇は名文家の書いたうちの名文であるさうだ。広田先生は其話をした時に、笑ひながら、尤も是は私の説ぢやないよと断わられた。成程三四郎にも何処が名文だか能く解らない。只句切りが悪くつて、字遣が異様で、言葉の運び方が重苦しくつて、丸で古い御寺を見る様な心持がした丈である。此一節丈読むにも道程にすると、三四町も掛つた。しかも判然とはしない。

贏ち得た所は物寂びている。奈良の大仏の鐘を撞いて、其余波の響が、東京にある自分の耳に微かに届いたと同じ事である。三四郎は此一節の齎す意味よりも、其意味の上に這ひかゝる情緒の影を嬉しがつた。三四郎は切実に生死の問題を考へた事のない男である。考へるには、青春の血が、あまりに暖か過ぎる。眼の前には眉を焦す程な大きな火が燃えている。其感じが、真の自分である⁽⁵⁾。

上記引用に続いて、三四郎は葬列に出会う。

(E)

小供の葬式が来た。羽織を着た男がたつた二人着いてゐる。小さい棺は真白な布で巻いてある。其傍に奇麗な風車を結び付けた。車がしきりに回る。車の羽瓣が五色に塗つてある。それが一色になつて回る。白い棺はきれいな風車を絶間なく揺かして、三四郎の横を通り越した。三四郎は美しい葬だと思つた。

三四郎は他の文章と、他の葬式を余所から見た。もし誰か来て、序に美禰子を余所から見ろと注意したら、三四郎は驚ろいたに違ない。三四郎は美禰子を余所から見る事が出来ない様な眼になつてゐる。第一余所も余所でないもそんな区別は丸で意識してゐない。たゞ事実として、他の死に対しては、美しい穏やかな味があると共に、生きてゐる美禰子に対しては、美しい享樂の底に、一種の苦悶がある。三四郎は此苦悶を払はうとして、真直に進んで行く。進んで行けば苦悶が除れる様に思ふ。苦悶を除る為めに一步傍へ退く事は夢にも案じ得ない。これを案じ得ない三四郎は、現に遠くから、寂滅の会を文字の上に眺めて、夭折の憐れを、三尺の外に感じたのである。しかも、悲しい筈の所を、快よく眺めて、美しく感じたのである⁽⁶⁾。

その後、三四郎は画家の原口の家に行き、美禰子に借りた金を返そうとするが、結局返せず終わる。そして、広田を大学教授にしようという与次郎の計画が失敗したことを知る。三四郎は大学へ行く途中に広田を見る。

(F)

門内を一寸覗き込んだ三四郎は、口の内で、「ハイドリオタフヒア」と云ふ字を二度繰り返した。此字は三四郎の覚えた外国語のうちで、尤も長い、又尤も六づかしい言葉の一つであつた。意味はまだ分らない。広田先生に聞いてみる積である。かつて与次郎に尋ねたら、恐らくダーターフアブラの類だらうと云つてゐた。けれども三四郎から見ると、二つの間には大變な違がある。ダーターフアブラは躍るべき性質のものと思へる。ハイドリオタフヒアは覚えるのにさへ暇がある。二返繰り返すと歩調が自から緩漫になる。広田先生の使ふために古人が作つておいたような音がする⁽⁷⁾。

大学の帰りに広田の家を訪れた三四郎は、広田が寝ているので、そばで待っている。

(G)

三四郎は返そうと思つて、持つて来たハイドリオタフヒアを出して読み始めた。ぼつぼつ拾ひ読をする。中々解らない。墓の中に花を投げる事が書いてある。羅馬人は薔薇を affect すると書いてある。何の意味だか能く知らないが、大方好むとでも訳するんだらうと思つた。希臘人は Amaranth を用ひると書いてある。是も明瞭でない。然し花の名には違ない。夫から少し先へ行くと、丸で解らなくなつた。頁から眼を離して先生を見た。まだ寐てゐる。何でこんな六づかしい書物を自分に借したものだらうと思つた。それから、此六づかしい書物が、何故解らないながらも、自分の興味を惹くのだらうと思つた。最後に広田先生は必竟ハイドリオタフヒアだと思つた。

さうすると、広田先生がむくりと起きた。首丈持上げて、三四郎を見た。

「何時来たの」と聞いた。三四郎はもつと寐て御出なさいと勧めた。實際退屈ではなかつたのである。先生は、

「いや^{おき}起る」と云つて^お起きた。それから例の如く^{ごと}哲学の^{けむり}烟を吹き始めた。烟が沈黙の間に、棒になつて^で出る。

「^{ありがと}難有う。書物を返します」

「あゝ。——^わ読んだの」

「^{わか}読んだけれどもよく^{ひようだい わか}解らんです。第一^{わか}標題が解らんです」

「^{わか}ハイドリオタフピア」

「何の事ですか」

「何の事か僕にも^{わか}分らない。兎に角^{わか}希臘語らしいね」

三四郎はあとを尋ねる^{わか}勇気が抜けてしまつた。先生は^{あくび}欠を一つした^{ひと}(⁸)。

その後三四郎は広田から寝ている間に見た夢の話を聞かされる。

以上が『三四郎』において、ブラウンに関わる部分のすべてである。

2

では、以下、順に引用した箇所について考察をしてみよう。

まず、(A) に出てくるブラウンの一節の原文は以下の通りである (括弧内は拙訳)。

... the iniquity of oblivion blindly scattereth her poppy, and deals with the memory of men without distinction to merit of perpetuity. (忘却の邪悪さはケシをむやみにまき散らし、永遠不滅の報いに対して人々の記憶を無差別に扱う。)⁽⁹⁾

ブラウンの原文にある“iniquity” (不正、不法、邪悪、罪) は、聖書に頻出する語で、そこでは、人間が自らの“iniquity”を許し給えと神に祈る文脈で使われることが多い。(十二)の最後で、三四郎が美禰子に「結婚なさるさうですね」と聞いた後、美禰子が答える有名な言葉、「われは^わ我が^{とが}愆を知る。我が罪は常に我が前にあり」は、旧約聖書の「詩篇」第51章3節であるが、その前後に、この“iniquity”が使われている (下線は引用者)。

51 : 2 Wash me throughly from mine iniquity, and cleanse me from my sin.

51 : 3 For I acknowledge my transgressions: and my sin is ever before me.

51 : 4 Against thee, thee only, have I sinned, and done this evil in thy sight: that thou mightest be justified when thou speakest, and be clear when thou judgest.

51 : 5 Behold, I was shapen in iniquity; and in sin did my mother conceive me. (欽定訳聖書)

51 : 2 わが不義をことごとくあらひさり我をわが罪よりきよめたまえ

51 : 3 われはわが^{とが}愆をしる わが罪はつねにわが前にあり

51 : 4 我はなんぢにむかひて獨なんぢに罪ををかし聖前にあしきことを行へり されば汝ものいふときは義とせられ なんぢさばくときは咎めなしとせられ給ふ

51 : 5 視よわれ邪曲のなかにうまれ^め罪にありてわが母われをはらみたりき (文語訳聖書)

三四郎は (A) のこの「句が^め眼に^つ付いた」と本文に書かれているが、偶然目にとまったにして

は、“iniquity”という語は、詩篇の中の51：3、つまり美禰子が発した言葉の近くにありすぎるように思われる。もっともブラウンの一節は原文では段落の冒頭であり、「眼に付」きやすいことは確かである。また、詩篇51：5「視よわれ邪曲のなかにうまれ罪にありてわが母われをはらみたりき」は、(十一)の終わりで、死ぬ間際の母から、実の父は他にいと聞かされた広田のことを暗示していると考えるのは穿ちすぎであろうか。

さらに言えば、美禰子が三四郎に何度か言う「迷える羊」という語の出典として挙げられる旧約聖書「イザヤ書」第53章6節にも、この“iniquity”という語が出てくる（下線は引用者）。

All we like sheep have gone astray; we have turned every one to his own way; and the LORD hath laid on him the iniquity of us all.

われらはみな羊のごとく迷ひておのおの己が道にむかひけり 然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうへに置たまへり（文語訳聖書）

美禰子が意に沿わぬであろう結婚をすることがあらかじめ予測されていると言えるのかもしれない。美禰子、三四郎、野々宮はそれぞれ「己が道にむか」うしかないのかもしれない。

さらに、(A)において漱石の訳では、“iniquity”という語が訳されていないことにも注目したい。拙訳で「忘却の邪悪さ」とした部分は、単に「寂寞(=静かでひっそりとしているさま(『大辞林第2版』))」となっている。『大辞林』の同項には、例文として「古き墳墓が一として存在する間に」という漱石の「趣味の遺伝」からの引用があり、漱石にとって「寂寞」という語は、墓を連想させるものであったと思われる。

さて、(A)に出てくる「ケシ」とは、「忘却」、「眠り」、「死」、「再生」の象徴であり、それはまさに『壺葬論』の主題そのものでもある。三四郎が「ハイドリオタフヒア」を広田に返しに行く場面(G)で、広田が眠っているのは象徴的である。その広田の姿は、「ハイドリオタフヒア」そのもので、後に、三四郎が、「広田先生は必竟ハイドリオタフヒア」だと思うことに通じる。西洋の文化では「眠り」のことを「小さな死」と呼ぶことがある。人が眠っている姿は死んでいるように見えるからであろう。

引用(B)で、「死」が日常生活でありふれたものとなり、新聞に載る単なる数字となっていることを広田は指摘する。また、「六号活字」とわざわざ書かれていることも「死」がいかに軽く扱われているかを端的に示している。というのも「六号活字」とは、約3ミリメートル角の小さな活字で、新聞雑誌の雑文や埋草などに用いられ、それで組まれたものは「六号記事」として取るに足りないものと見なされていたからである。与次郎が「偉大なる暗闇」に関する新聞記事に対して、「文芸時評の六号活字の投書にこんなのが、いくらでも来る。六号活字はほとんど罪悪のかたまりだ。」(十一)と言うのも「六号記事」への侮蔑が込められている⁴⁰。

引用(C)は全5章からなる『壺葬論』の終結部の訳である。『三四郎』の中で、これほど長い引用は他にはなく、そのことだけでも漱石が『壺葬論』の、しかもこの箇所を重視していたかが分かるだろう。漱石の訳文で「聖徒イノセントの墓地」とあるのは、漱石の勘違いで、ブラウンの原文では、“St Innocents Church-yard”⁴¹となっているから、その勘違いも無理はないが、ここでの“St Innocent”とは、個人の名前ではなくて、イエスが生まれたときに、ヘロデ王の命令によって殺された2歳以下のいわゆる「罪なき嬰兒」のことである。それにちなんで“St Innocent's church-yard”と呼ばれているのである。従って、ブラウンの原文を和訳すると、「サン・イノサン墓地」となる。

さて、引用(C)は要するに、敬虔なキリスト教徒であったブラウンの死生観の表明であり、

それは端的に言えば現世蔑視である。キリスト教という信仰さえあれば、生前の有名無名は無意味となり、後世において名が残ることも無意味である。来世において永遠に生きることこそキリスト教徒の本願なのである。しかし九州の田舎から上京してきたばかりの若い三四郎にとって、ブラウンのそういう考え方はあまりにも自分のものとはかけ離れており、まるで空虚な念仏のように心に響いてこない。自分の将来に大きな野心と期待を抱いている三四郎には、現世での成功こそ現実の課題となっているからである。

そのことは引用 (D) から明らかなである。「三四郎は切実に生死の問題を考へた事のない男である。考へるには、青春の血が、あまりに暖か過ぎる」のである¹⁰⁾。また、「眼の前には眉を焦す程な大きな火が燃えている」という一文には、美禰子との関係を進展させたいという三四郎の切実な思いが表われている。

引用 (D) の冒頭では、漱石はブラウンの名を挙げないで、ただ「名文家」とのみ記している。ブラウンが「名文家」であるとの説は、漱石の当時、英文学では通説となっていて、広田の言葉はそれを繰り返しているに過ぎない。サミュエル・ジョンソン、チャールズ・ラム、S・T・コールリッジ、ド・クインシーなど、ブラウンを称揚し、その影響を自他共に認めている作家は数多い。しかし、広田が「それは私の説ではない」と言ったのを受けて（このことから広田は名文だとは思っていない、あるいは名文かどうかわからないと言えるだろう）、三四郎も「どこが名文だかよくわからない」と考える。ブラウンの文章はジョンソンの生きた18世紀には既に古式ゆかしいイメージを持っており、イギリスにおいてさえそうであるのだから、まして20世紀の三四郎にとっては、「古い御寺」のように思われるのは当然である。「今」の三四郎にとって関心がないのも無理はない。しかも後の引用 (G) にもあるように三四郎にはブラウンの文章を理解できるだけの英語力はない。おそらくキリスト教についての理解もほとんどないであろう。(十二) に「三四郎は全く耶蘇教に縁のない男である」とあることからそれはわかる。三四郎は、美禰子がキリスト教徒であることを、美禰子が結婚することを本人に確認することとほぼ同時に知る。先に引用した美禰子の言葉、「われは我が愆を知る。我が罪は常に我が前にあり」もまた、三四郎にとってはブラウンの文章同様「古い御寺」の響きがしてもおかしくはないが、それに対する三四郎の反応は書かれていない。しかし、その言葉を発した者こそ、三四郎の「青春の血」を熱くしている美禰子当人なのだから、三四郎の受けた衝撃は極めて大きかったことが想像できる。

「他の文章」で「死」を、現実世界で子供の「葬式」を見た三四郎は、「快よく眺めて、美しく感じる」（引用 E）。一方、美禰子に対しては、「苦悶」を感じている。その「苦悶」とはもちろん美禰子への一方的な恋情である。三四郎が上京して間もない頃、大学の池の端で美禰子を見て以来、三四郎は美禰子の取る曖昧な態度に翻弄されてきた。「余所から見る事が出来ない」ほど、美禰子は三四郎にとって大きな存在となっている。三四郎の美禰子への思いは、「死」や「葬式」と対置されるが故に、それは三四郎にとって「生」の証となる。

また、「第一余所も余所でないもそんな区別は丸で意識してゐない」という一節は、引用 (A) の原文にある“without distinction”（無差別に、区別なく）に通じるものがある。

引用 (F) の「二返繰り返すと歩調が自から緩漫になる」という文は、引用 (F) の前の段落にある「青年の隊伍に紛れ込んだ先生は、歩調に於て既に時代錯誤である。左右前後に比較すると頗る緩漫に見える」という広田の描写の反響である。ここで既に三四郎は「ハイドリオタフヒア=広田」という、引用 (G) に出てくる考えを先取りしていると言える。また引用 (F) が読者に与える滑稽な印象は、特に「ハイドリオタフヒアは覚えるのにさへ暇がある」において際だっている。美禰子のことを除けば何事も深刻に考えない三四郎の無頓着な性格がよく表れていると

言える。

引用 (G) では、三四郎が「ハイドリオタフヒア」をまともに読んでいないことが語られる。返そうというときに「ぼつぼつ拾ひ読をする」というのは、あまりに杜撰であろう。もちろん一度読んだのを再び「拾ひ読」している可能性はあり、後の方で広田に「読んだけれどもよく解らんです」と言っていることから、一応全部に目を通したとも考えられるが、引用 (G) の前半を見る限り、真面目に読んだとは到底言えないであろう。三四郎はただ「ハイドリオタフヒア」という本が持っている古めかしさ、死のイメージを感受しただけであり、お経を聞いているような気持ちでページをめくっただけだと考えてよい。そしてそれは美禰子に対する思いを忘れられない三四郎にとっては、その思いを一層強める働きをしていると言える。美禰子こそ三四郎にとって「生」であり「光」である。三四郎が池の端で初めて美禰子に出会う場面で「光」が使われ、最後の展覧会の場面で、美禰子の夫が「陰と日向の段落が確然して——」と言うのもその表われである。

「ハイドリオタフヒア」は、その「生」、その「光」の輝きをよりはっきりさせるための「死」であり、「陰」である。三四郎が「広田先生は必竟ハイドリオタフヒアだと思った」のも、自分の将来は広田とは違うと自負しているからであろう。『三四郎』の冒頭、上京の汽車の中で三四郎は「是から東京に行く。大学に這入る。有名な学者に接触する。趣味品性の具つた学生と交際する。図書館で研究をする。著作をやる。世間で喝采する。母が嬉しがる」(一) と考えて、元気が回復した。そのほとんどは未だ成し遂げられていないが、若い三四郎にとって将来は大きな可能性を秘めたものであるはずである。青年なら誰しも抱く野心を三四郎もまた抱いている⁸³。

引用 (G) の後半で、広田は「ハイドリオタフヒア」の標題の意味さえわからないことを告白する。それまでの広田は、三四郎がその名を知る前から常に三四郎をその知識と思想で圧倒していたが、ここに至って、「ハイドリオタフヒア」の標題に関する限り、三四郎と同程度であることがわかる(ギリシア語だと言う点では三四郎以上であるが、「らしいね」という言葉から確信は持っていない)。今まで敬服していた人間が実はそれほどでもないとわかった三四郎は「あとを尋ねる勇気が抜けてしま」う。広田は、三四郎がそうなろうと思って目指そうとする人間ではない。三四郎はむしろ広田とは正反対の人間になることが自分の生き方であるとおそらく無意識のうちに悟ったと考えられる。

3

2でブラウンに関わる部分について述べてきたが、そこから言えるのは、引用されたブラウンの文章が三四郎に2つのことを考えさせる働きを持っているということである。一つめは、「死」であり、二つめは「名声の空しさ」である。立身出世を志して上京してきた三四郎にとって、それらはどちらも受け入れられるものではない。生を謳歌し、名を立てることこそ三四郎の願いのはずである。三四郎がブラウンの文章はわからないと考えるのは、文章自体の難解さ故というよりも、主としてそこに表わされている考え方が自分には受け入れられないからである。広田は三四郎とは逆にその考え方を受け入れているように思われる。従って、三四郎は「広田はハイドリオタフヒアだ」と言うのである。

三四郎は、「此六つかしい書物が、何故解らないながらも、自分の興味を惹くのだらうと思」うが、その理由は、書物の考え方が自分には受け入れ難いが、その主題である死について、または、名声の空しさを意識することで、それらとは逆のものを追い求めさせるという結果になるからである。三四郎は、敢えて望まないもの、否定すべきものを考えることによって、自らの考えなり

行動なりを正当化しようとする。そして正当化できると思っている。「興味を惹く⁽⁷⁾」のはそのためである。

三四郎は徹底的に自意識過剰の人間として描かれている。自分が他の人間にどのように思われるか、どのように見えるかをいつも考えている。冒頭の汽車の場面からそれは明白である。そして頭の中であれこれ思いこみを膨らませ、ああでもないこうでもないと思ひ悩む。ある場合には妄想を繰り広げ、自分で自分に辟易することさえある。一般に青年はそういうものであるし、それはまた漱石自身のイギリス留学中の体験の表れであるのかもしれないが、三四郎の描かれ方は滑稽なほどである。美禰子への思いを一方向的に募らせ、美禰子の言動に一喜一憂する。田舎から出てきた三四郎にとって美禰子は東京の持つ魅力と同じくらい三四郎を惹き付ける。当初の目的であった、学問に専心し、身を立てるという願いも中途半端でただ流されている。本気で考えるのは美禰子と自分、あるいはよし子と自分といった対女性関係だけである。

友人となった与次郎に振り回され、大学の授業にも真面目に取り組んでいるとは言えない三四郎は、そんな自分の有り様をどうすることもできない。しかしその一方で美禰子への思いは募っていく。(十)で三四郎は思いきって、「たゞ、あなたに会ひたいから行つたのです」と言うことで美禰子に愛を告白するが、美禰子の反応は冷淡である。というのもこの時点で既に婚約者がいるからである。ブラウンからの最初の引用である(A)が出てくるのが同じ(十)で、三四郎が美禰子に告白する少し前であることを指摘しておきたい。先述したように、ブラウンの文章は、その意味するところとは逆の行動をとるように三四郎を動かしている。

従来から指摘されているように、『三四郎』という小説においては、心理描写、内面描写というものが三四郎の場合を除いてほとんど出てこない。特に美禰子の場合には全く出てこない。それゆえに読者は美禰子の言動を自分で解釈しなければならないし、意味づけを行わなければならない。その点で読者は三四郎と同じ立場にいる。しかし読者は、自意識過剰で、うかつなところのある三四郎が気づかないことも気づくことができる。例えば、そもそも三四郎が初めて池の端で美禰子を見たとき、美禰子は野々宮のいる建物を眺めていた。読者はそこから、そしてその後の美禰子の言動から、美禰子の愛は野々宮に向いていることが見て取れるが、三四郎は自分に向いていると思ひこむ。あるいは、自分の行動如何によって美禰子の愛を勝ち得ると思ひこむ。美禰子と三四郎のちぐはぐな会話は、そういう三四郎の勘違いの結果である。しかし当の三四郎は大体において真面目であるから、読者の受ける印象との落差のために、三四郎の言動には常に滑稽感がつきまとう。三四郎は借りたばかりの「ハイドリオタフヒア」の「末節」(引用(C))を歩きながら読み、「此一節丈読むにも道程にすると、三四町も掛つた」(引用(D))。本は最初から読むのが普通であるのに、三四郎は借りたばかりの本をなぜ「末節」から読むのだろうか。この箇所を引用した漱石の意図を切り離して考えれば、それだけでも滑稽である。そして引用(G)における「まだ寐てゐる」という一文は滑稽である。

繰り返し言えば、このように三四郎の言動には滑稽感が漂っている。「ハイドリオタフヒア」に表われている「死」や「名声の空しさ」という主題が持つ荘重さとは正反対である。三四郎は「ハイドリオタフヒア」の主題を自分の問題として捉えることもできず、むしろ逆の方向へと向かうと言える。

おわりに

三四郎は、引用(G)で明らかなように、辞書無しでブラウンの文章を鑑賞できるだけの英語力を持っていない。読者は、漱石の訳によるブラウンの文章を三四郎とともに読むことになる。

三四郎が歩きながら、従って辞書無しで読んだことになっている引用 (C) の一節の場合と引用 (G) の場合とは扱いが大きく異なっている。ブラウンの文章に直接言及しているのは、引用 (A)、引用 (C)、引用 (G) の3つだけで、このうち、引用 (A) については、2で述べたように、“iniquity” という語が美禰子との関連で重要であろう。引用 (C) は、3で述べたように「ハイドリオタフヒア」の「末節」で、キリスト教徒ブラウンの考えが端的に示されている箇所であり、引用 (G) においては三四郎が「広田=ハイドリオタフヒア」という認識に至ることから、それぞれ意義を持つと言える。

そうしてみると、漱石は、英文学の中でも当時のほとんどの日本人が知らなかったであろうブラウンの「死」を主題とする作品を引用することで、三四郎が自身の行動の動機付けをし、正当化することを、または自己認識に至ることを意図していたと言えるのではないだろうか。

注

『三四郎』の本文は次の版による。

『漱石全集』第五巻（岩波書店、1994）。以下『全集』と略記。

- (1) 木村毅「『三四郎』の中の英文学」（『英語青年 特集：夏目漱石と英文学』第112巻第7号所収、460 - 61.）、矢本貞幹『夏目漱石——その英文学的考察』（研究社出版、1971）、飛ヶ谷美穂子「ハイドリオタフヒア、あるいは偉大なる暗闇——サー・トマス・ブラウンと漱石——」（佐々木光昭夫編『日本近代文学と西欧——比較文学の諸相』（翰林書房、1997））、安藤久美子「『ハイドリオタフヒア』訳からみた三四郎」（『国文学解釈と鑑賞』第66巻第3号（至文堂、2001）所収、95 - 101）など。
- (2) 『全集』、536.
- (3) 『全集』、536 - 37.
- (4) 『全集』、537 - 38. 一般的には「サン・イノサン墓地」と呼ばれるが、正しくは「サン・ジノサン墓地」。小池寿子「廃墟のメタモルフォーズ——パリ、サン・ジノサン墓地」（谷川渥（編）『廃墟大全』中公文庫（中央公論新社、2003）所収、75 - 92）参照。また、『全集』の注釈（673）には「ローマ教皇インノケンチウス（Innocentius）のことか。何世のことかは不明」とあるが、詳細は本文及び上記の通りである。
- (5) 『全集』、538. なお、「三四町」は、メートルに換算すると、およそ3、4百メートルであるから、歩く速さを毎分70メートルと仮定すれば、時間に直せば、およそ5、6分となり、10行に満たない原文を読むには時間がかかり過ぎのように思われる。普通に読めば20秒から30秒くらいであろう。
- (6) 『全集』、538 - 39.
- (7) 『全集』、567.
- (8) 『全集』、571 - 72.
- (9) *Sir Thomas Browne: The Major Works*, ed. C. A. Patrides (Penguin, 1977), 310. 以下 *The Major Works* と略記。
- (10) 菊池寛「無名作家の日記」（1918）にも、「恐らくこの男の名前は、文芸雑誌などには、六号活字でも出たことはあるまい」、「最初にI新聞が、六号活字ではあったが、雑誌「×××」の創刊を祝福した」という一節がある。
- (11) *The Major Works*, 315.
- (12) 三四郎は以前、(三) で女の鞭死体を見ており、「生死の問題」について考えてはいる。その時は、「すぐ帰ろうとして、^{きびす}踵をめぐらしかけたが、足がすくんでほとんど動けなかった。土手を^は這い上がって、座敷へもどったら、^{どうき}動悸が打ち出した」とあるように、三四郎は非常に衝撃を受ける。

- (13) もっとも、いわゆる世俗的な成功を望むのであれば、文科ではなく法科に進み、高級官僚になろうとするだろう。美彌子が結婚する相手もおそらく法科出身である。その点で三四郎の考える「立身出世」は当時の世俗のものとは異なる。(一)において、「法科ですか」という広田の質問に対し、三四郎が「いえ文科です」と答えているのは象徴的である。